後水尾院百首

へ4
1783

門 ヘ 部 人
號 1783
冊

後水尾院百首

早稲田大學圖書

後水尾院

御いゑの百首御製

立春

あはさらや海との雲はをしなくて

おさこりまきよるや来ぬらん

殘雪

世をふるのたえの跡をのこすとも

この見と四月乃花をはらし

谷鶯

うくひすのこゑのうちや雪解かな

した乃さくろもをかりぬけたく

明治四十年九月十二日 高田早苗氏寄贈

殘雪

うす緑しきみやこふもえいでゝ月しれ
かき分けもえてのこれる雪　卯

若菜

雪下つんであるさはへのこほりぬるゝわかなそ
わかなにむてうたゝやまとなし

里梅

吹からふそよふこちてやむめか香ん
さらにとこゝろの月のちこ　風

窓梅

きしよとしてこゝをやとえむかさちや
人のきそちむめのさかり　球

春月

帰るかひやくゐものうきよるよみ
いらをもへるともいはる月　小

春曙

さし海の乃んやあれをそこや
しらたまえしれまのあけほの

帰雁

たくそれて雲にしさてのかゑるは
うつれきの絲をいそしまん

春雨

けつのやれやのあめぬるもやや
かみとをとされてをそあの

春柳

はすゝしき根の竹の子しや春霞

たなしみとりもちおやさしく　らん

桜花

すそえ多く母娘にきるやみやこの

世のなかともかりをるやはかぬ　木

初花

めつらしと見る花をさてちのちしかな

さくみえふりきそりけて　この郷

見花

かゝみなれやみ雲とものうれまゝさ

この花れのちきさをやのはく

花笠

いつそ城のかりかふしたむのはるかな

さきれて物見かしらやあれ

落花

くしやぬけちれしとうのやすきぬ

むみはれをあかのとへ　らん

歌舞

なにもつかいそれしまして郷ん

しれよみはつ恵や下ふきの露

花落

いけとすむをしぬやさしくもりを

うつむけはなと落としさく　らん

暮春

まかなりゆくそやはるにわかれそうり
あやなしやさくらのあとのなごし　毎

更衣

ぬぎかへし乃あさきころもめかなつ衣
うつくしき衣もあまりやは　なまし

卯花

たきさ以左氣なりしといふ人のゆきに
月まつ夜はもの陰乃空をり

郭公

ほとゝぎすなきつるかたのみさゆみえ
ふふくもおもひまよひはなもなき

聞時鳥

ゑぞしらぬいつくはきこゆと聞く
山のはもむさし野中の夜のこゑ

郭公稀

うちしくなれをゆるなく音ときこえて
あをぞのきのかやましかもおかし

五月橘

すさまてしふむしとをくまはをの
ぬしならぬ香りのかをとちるそれ

早苗

せきのかやとるに水はなかる花や
いのちあやあさくさとるらん

五月雨

本すゝみとうをめきむへくたき松
はれにきえ川めあれ五月雨の ころ

鵜河

河ぞひの柳かすゑやかゝり火の
こゝろみえてかゝるうかふねかな

螢

よるさえんねしそいへのあかりさへ
なりしきやたえれどもこゝろもかな

夏草

あけはてきのむらさき雨の名残うし
かれあつくさ野うけ垣のうりしけるや

夏月

ありともとみちてしかば秋かぜ
月のころはまたねすゞしきを

夕立

俄かなる雲の波をしらて龍田川と
うつくしとやまて夕日さしの空

杜蟬

夕日はれ雨は清の雲なく蟬の
声かしあくのこゝろさての空

夏祓

みな月の名の川かはへにて麻の衣
きよりなりしては瀬すし

母

早秋

すゞしさは井にうつしむらにれてゐ秋風
ころもてかろきけさの

七夕

むかしをはなるゝこよひみゆく
星の契りやあさきせはなし　真恵

荻風

うけさきに満りにふくかぜにも
のきばの荻の秋のこゑ　善

荻露

おのやどにうつしうゑても荻の葉の
露のむすびはみえへくもなし

女郎花

ちるかげにかざしにせむの女郎花
くもひとあまたのあとにこそ

夕虫

やどはもとのすみかにむしのこゑ
まちをやまゝのまちかね　了恵

荻露

あきをまつのこゑそ秋の露
さしてしらぬやはをしれ　了恵

初雁

ゆるさしと秋しらすきゝたれ
こゝろのやまりしられ

秋夕

なかなかにしはしくるれ秋のうさなきん　宴
我やはかしの夕くれの

山夕

吹のこゑうち秋風むかふほのしれぬ家
月乃かかれのやとりの鐘の　宴

野月

やとりわか月も花の露わけゆき
家路にすゝきしくさ木たてゆく

河月

月うすむ夜さしくる川かは淀乃
いさなの舟きしよしを見さかゆく

江月

芦原の波を立てやあしまみや
こりくしこのかたの波の月なき

浦月

浦舟のかよへのるきこえ月もとも
なかくゆかくさきやあきの乃うら人

籬菊

する家秋をまかせて夕の色めみしら
山川しら菊りうちよるかから那

擣衣

うたを作きしくへこりく夢やうれれ
ゆめてきうれしの志ちしあちとを見

暁霧
さらでだにとゞめかねつるわかれぢを
いつきぬ夜ふかき峯の八重きり

岩紅葉
ふれぬあらぬ枝も重ねて紅ふかし
色きえてをちりぬるをみるならぬとし

瀧紅葉
とみせ川水のもとはちりぬまも
りみちはくれなゐのたきとこそ

九月尽
くれゆけばいつてものこるむかしかな
秋ぞとゞきゝ秋のこれ　紙

初冬
秋風のとほくににふきかへて
まつゆかしう冬を八重の利

時雨
ゆふぐれきゝし海のはてなき風の
やうてさき秋小森しぐれる

落葉
ふけぬあめははるかにも木の
ことしの山の木のもと

初霜
あこそたかれやさくかきの有明の
さとはまさてはやかな

寒草

みかきもの草ともみえすなにとひ来て
人の稀なかりけりあはれ世中

千鳥

涙かく袖ならなくにぬれにけり
さよちとりやよなきそとなる

水鳥

みし秋のにしきをはらふあらしのみきは
かさね○こゝろうきねしの毛衣

氷初結

てる月のあとゝめしかはけふよりや池水の
かとしてき○けさやこほりそめけん

冬月

みるひとの袖さへやとる秋風に
おちそらなの月のさやけき

鷹狩

くれぬともあすやかへらむ狩人の
なれなれしくとりのおちくさ

野霰

みとも雨とふるあられ旅ねして
ゆふくれふきはらふあられ

浅雪

ふくかせにかはしかくれぬけさは
こふかれともなにけさ雪の郡

積雪

ひとそめて流ゝと見れとあとも なにとなく
まなひなりせは はとのしら雪

閑中雪

むとはまりんのみちのさへみし
雪をそこらいんもちときふの庭

歳暮

りふとにすきゆくゆとしほれぬそ
身しおとろくもいつもたちうき

初恋

あとひしりさつ花そかしいめと見わなくさ
こひのやゆちれすはままま

忍恋

あ毋をせえんしとちれ尓ぬと
おもいいわんも花かなるやま

祈恋

神きこえれしさえんぬとこめい
神とかそふることはしもとも

逢恋

いかりぬこともせたはきいつく
そくれしくしさうありかいたる

不逢恋

たちまいらにましとのかこええそそれ
柳ときうふあちりそのせ せと

歎恋

とろ神ハ祇ちまてちきれハかまの
祝みそこへん浮とたと　え次

逢恋

もらひあやあふさとなまハ浮かなし
くゆすかしてとふれさら　と

別恋

以前くなことともきはんしこのうちや
かみかりとゑしつけされとられなと

好雑恋

らはしてハさきひて久乱れとけ紙
あとみは人乃浮しもやく洗し

忍恋

くちかへてとふとどめとせもみちなに
人のかくれせともや思ひこ　ん

逢恋

むとやしてうんしてみねことをねわか衣
ありとハさしそもち着き床たちし

別恋

あけぼのとも乱れもハすまといせしめや
別れうつとハ云ろうひ雅し

恨恋

うしやよ乱へのとのいひはらなさり
まきとうくふもわもへせあらん

祈恋

神よいかにきゝしこゝろをしらせませ 涌
つらさし流しもかへすあなかしき

待恋

またもきたらにくるゝも暮て八幡かみ
たゝおもきはうき人そうらみよ

夜恋

ねしくてもさこしはまてしとかきちもく
こころ移そおもてもれむえられ さ

絶恋

さりとも思はすくさめきぬるも月の
なくつれかきをそれ 見哉

忘恋

千とせまて契りや色に深き衣 まこと
きるのはとりそこそきこえ

行恋

よしや人雨と名よつもこぬも思ひしる
わすれぬこのよ雨りしたいのれ

帰恋

ものつらきもしんと見はてもおと
えつ涙かかたみなりきもひと出し

浦松

すまうしや松風ことりも秋をへぬ
あまの苫のこくいやめかくし

窓竹

なよ竹のたわゝきほしては月ぞふれ
ほのかにかはしぬまとのうちの所

山家嵐

さびしさてやはこやまれ吹きこゑし
雅のふれまれかはしな何をそ

田家

おとろへ世をおもしくとてそ秋乃田の
かりいほのしぬやとりやは　あれ

羇旅

さびしさのうちぬるまでみふ寂にたに
このふる郷はわしもや宿　め次

述懐

なの世れはとかめのぞかはしやなくして
とのりあきれぬ身はくさるや

懐旧

こちくれとこのしくみの志えさきにめ
みもしにねるふことのはむ流りて

神祇

きのむかしよんもすそ川のすめれ世の
ねみは神ともきぬめくこ　をと

釈教

みてくさめにみまさやれひとゐる
はのからたる家とのやるらん

跋云

しきしまのこのさとれをみるにとら
またはのくさなるとめしは

右御製秘而世雖稀從
宮御所被下写乎
貞享四丁卯 仲夏

みなのきこえは御製ともしらよや何かちらす乃
やまふ三川もくむ男にしあきは花をも知る事
時々は里なる絶しておもしろやと耳に入る事なき
月をも花やうきつみてたゞ心やかましには身をまて霜よ
雪よそをもつるき老林は卯所しぬとも知毎春秋乃ち
の世は流とを兄なきくてあくよのとくとせしはきれは
筆書は道はましし後法を思て二三篇にあらしよ

いとしくちえて思ましり作しかるいぬ筆にも百首
うたしこしらり四季恋へつらかし作家にしみとなりんに
只やしまより家の事なりきとわとみさてなと
和の哥ハ婦人たる師とす亂とめしんさされハ志川の
女れ歌とやりうたのてらさきのくさかすくかん
いてひきてもあきぬつりな文作さる化女性
よめ乱火ハかこさる思ろりのすひつれ々化してくを

本さるめ法をさ海し乃身や縁ろり世をそハさしともき
やさしきん心ハ和哥の海王とれ道ふかる子と心有
取みてぬるくかん御ふゆやんさう花とをあれ
すむ川をそうとうしぬとのとて夜取る取さ家ほし
たのわかしら我くるれよせいふ事取むすへうら
此花中篤の古る化者と云

正徳三癸巳歳二三そりく和書之

謙入

ともやうやうたち我書物なりしくゆゑく
給しよハ丙市へつかハしけされけし